## 【資料文献コーナー】

### 『子どもに貧困を押しつける国・日本』

山野良一著（光文社新書・2014・11 初版）

はじめに

厚労省が昨年発表した「子どもの相対的貧困率」（２０１２年調査）は１６．３％と過去最悪を記録したと言われています。今、６人に１人、全国で約３２５万人の子どもが「貧困」におかれています。**貧困を子どもに理不尽に押し付けているのが日本政府であること**を著者は豊富な資料・データを駆使し、説得力をもって私たちに語りかけます。

子どもの貧困は見ようとしなければ見えないという現実を踏まえ、その見えにくさを少しでも解消したいという目的でこの本は書かれています。保育や幼児教育への政府支出は、未来への投資効率が高いという世界の潮流に反して、日本の福祉が相変わらず低空飛行を続けている姿を余すところなく描き出しています。

本書全体に貫かれているのは、著者が児童相談所に勤務していた頃の実践のなかで体得した「経済的にしんどい状況に置かれた子どもという社会的弱者の『**当事者としての立場**』を大切にする」という視点です。

１　本書の構成

本書は以下の５章から構成されています。

**第１章「今なお日本は子どもの貧困大国」**では、日本における子どもの相対的貧困率の現状についての議論を皮切りに、主に子どもを抱える低所得世帯の経済的困難や金銭的な公的支援の課題点を見ていく。

**第２章「最低の保育・教育予算、最高の学費」**では、公的な教育や保育の現状を、子どもの貧困という観点から議論をし、日本の場合、家族に対する経済的な支援に加え、教育・保育サービスも不十分であることを示す。

**第３章「報じられた子どもの貧困問題」**では、「無保険の子ども」や「住民票がなく居所不明の子ども」、さらに児童養護施設や生活保護など、ここ数年マスコミで取り上げられてきた子どもの貧困に関するトピックスを取り上げ、その問題点を究明する。

**第４章「家族依存社会の生きづらさ」**では、経済的困窮状況におかれた子どものしんどさや、子どもの貧困が拡大する社会全体の変容について理論的な考察を深める。

**第５章「貧困対策とコストパフォーマンス」**では、子どもの貧困対策法の成立過程や問題点について整理するとともに、社会投資的な視点について言及し、さらに子どもの貧困解決のために動きだしている先駆的な地域の活動を紹介する。

２　家族依存社会日本

私がこの本のなかで最も注目した箇所は子どもの貧困の根本的原因は「子どもにかけている社会保障費の低さ」・「家族依存的な教育費の負担構造」・「家制度から抜け出せないでいる扶養義務制度」などの「家族依存社会日本」にあるという**第４章の指摘**です。日本社会は「家制度」という歴史的特質を現在まで温存し、貧困という社会的にあってはならないものの解決を公的な機関の責任を免除させて、家族のみに委ねようとしてきたのです。

３　子どもの貧困からの脱出対策

**第５章**では子どもの貧困からの脱出対策としては以下の５点を提言しています。

◆地域での取り組み①学習支援
◆地域での取り組み②支援ネットワーク作り
◆官民一体の協力体制
◆子どもの駆け込み寺としての居場所づくり
◆民間だけに任せてはいけない

《文責：針谷正紀》